

普門品五箇の大事

第一 無^む尽^{じん}意^に菩^ぼ薩^{さつ}の事

御義口伝に云はく、無^む尽^{じん}意^にとは円融の三諦なり。無^むとは空諦、尽^{じん}とは仮諦、意^にとは中道なり。觀世音とは、觀は空諦、世は仮諦、音は中道なり。妙法蓮華經とは、妙は空諦、法蓮華は仮諦、經は中道なり。三諦法性の妙理を、三諦の觀世音と三諦の無^む尽^{じん}意^にに対して説き玉ふなり。今日^{いま}蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は末法の無^む尽^{じん}意^になり。所詮無^むとは我等が死の相、尽^{じん}とは我等が生^{せい}の相、意^にとは我等が命根^{あいだ}なり。然る間^{あいだ}一切の法門、境智冥合^{きょうちみょうごう}等の法門、意^にの一字に之を摂入す。此の意^にとは中道法性なり。法性とは南無妙法蓮華經なり。仍^よつて意^にの五字なり。我等が胎内の五位の中には第五番の姿なり。其の故は第五番の姿は五輪なり。五輪即妙法等の五字なり。此の五字の文又意^{また}の字なり。仏意^{ぶつち}とは妙法の五字なり。此の事別に之^{これ}在り。仏意^{ぶつち}とは法華經なり。此を寿量品にして是^ぜ好^{こう}良^{りょう}薬^{やく}とて三世の諸^{この}仏の好^{この}みの良^{この}薬^{この}と説かれたり。森羅三千の諸法、意^にの一字には過^とぎざるなり。此の仏意^{ぶつち}を信^{しん}ずるを信心と云ふなり。されば心は有^と分別なり。俱^{とも}に妙法の全体なり。

第二 觀^{かんの}音^ん妙^{みょう}の事

御義口伝に云はく、妙法の梵音は薩^さ達^だ摩^まと云ふなり。薩^さとは妙^まと翻^{ほん}ず。此の薩^さの字は觀^{くわん}音^{おん}の種子^{げんもく}なり。仍^よつて觀^{くわん}音^{おん}法^{ほう}華^わ眼^{がん}目^{もく}異^い名^{みょう}と釈せり。今末法に入^いつて日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る事、觀^{くわん}音^{おん}の利益より天地雲泥せり。所詮觀^{くわん}とは円觀なり、世とは不思議なり、音とは仏機なり。觀^{くわん}とは法界の異名なり。既に円觀なるが故なり。諸法実相の觀^{くわん}世^{せい}音^{おん}なれば、地獄・餓鬼・畜生等の界々を不思議の世界^{ちけん}と知見するなり。音とは諸法実相なれば、衆生として実相の仏に非^ひずと云ふ事無し。寿量品の時は十界本有と説いて無^{すて}作^{すて}の三身なり。觀^{くわん}音^{おん}既に法華經を頂受せり。然れば此の經の持者は觀^{くわん}世^{せい}音^{おん}の利益より勝れたり云云

第三 念^{ねん}々^{ねん}勿^{もつ}生^{しょう}疑^ぎの事

御義口伝に云はく、念^{ねん}々^{ねん}とは一つの念は六凡、一つの念は四聖なり。六凡四聖の利益を施すなり。疑心を生^{なか}ずること勿^{なか}れ云云。又云はく、念^{ねん}々^{ねん}とは前念後念なり。又云はく、妙法を念^{ねん}ずるに疑^ぎひを生^{なか}ずべからざるなり。又云はく、三世常住の念^{ねん}々^{ねん}なり。之に依^よつて上の文に是故衆生念と云へり。今日^{いま}蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉りて念^{ねん}々^{ねん}勿^{もつ}生^{しょう}疑^ぎ

の信心に住すべきなり。煩惱即菩提・生死即涅槃疑ひ有るべからざるなり云云。

第四 ^{に ぐりょうがん} 二求 両願の事

御義口伝に云はく、二求とは求男求女なり。求女とは世間の果報、求男とは出世の果報なり。仍^よつて現世安穩は求女の徳なり、後生善処は求男の徳なり。求女は竜女が成仏、生死即涅槃を顕はすなり。求男は提婆が成仏、煩惱即菩提を顕はすなり。我等が即身成仏を顕はすなり。今日^{いま}蓮等^{たくい}の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る行者は、求男求女を満足しては父母の成仏決定するなり。

第五 ^{じんりやく} 三十三身利益の事

御義口伝に云はく、三十とは三千の法門なり、三身とは三諦の法門なり。又云はく、三十三身とは十界に三身つつ持すれば三十なり。本の三身を加ふれば三十三身なり。所詮三とは三業なり、十とは十界なり、三とは三毒なり、身とは一切衆生の身なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は三十三身の利益なり云云。